全国草サッカー 地域に支えられ

2019年に開催された第33回全国少年少女草サッカー大会でも熱戦が繰り広げられた＝19年8月10日、静岡市清水区の蒲原東小

全国少年少女草サッカー大会

今年は第37回大会（34～36回は新型コロナの影響で中止）。女子は８月11日から３日間、男子は17日から４日間を予定している。規模を縮小した今回は国内外から男子128チーム、女子24チームが集まり、静岡市清水区を中心に、37会場で開催。

あすから4年ぶり開催 実行委員長・西村勉さんに聞く

第37回全国少年少女草サッカー大会（朝日新聞社など主催、第一三共ヘルスケア協賛）が11日から静岡市で開かれる。コロナ禍を経て、開催は4年ぶり。国内外から150チーム超が集う国内最大規模の大会は30年以上続き、日本代表選手も生み出してきた。実行委員長の西村勉さん(66)に今大会にかける思いや大会の魅力を聞いた。

――久しぶりの開催です。なにか変更した点はありますか？

新型コロナウイルスの影響で、大会を開催できない時期が続きました。今回開催にあたり、感染症や熱中症対策に力を入れました。

チーム減らし感染・熱中症対策

熱中症対策では試合開始時間を午前9時から午前8時半に早め、1日の試合数を減らし、昼過ぎには試合が終わるようにしました。これを実現するため、大会の参加チーム数を減らしました。いままで男子は256チームでしたが、今回は128チームです。結果として、一つのグラウンドに集まるチーム数も減り、3密回避にもつながります。

――男子と女子の日程も分かれました。

コロナ禍を経て、いまで小学生を受け入れてくれていた市内の宿泊施設がいくつか廃業してしまいました。受け入れのキャパシティーの問題などもあり、男子と女子の日程を1週間ほどずらしました。

――第1回大会は1987年。歴史も長いですね。

大会は当初、全国でも有数の強豪だった清水の小学生の選抜チーム「清水FC」と試合ができるという憧れなどが一つの動機になっていました。94年から海外のチームも参加するようになり、国内外の様々なチームと試合をし、自分たちがやってきたことや実力を確かめることができる場になっています。

国内外チームと対戦 実力確認

――1位から最下位まで順位を決めるのも特徴です。

この大会では勝っても負けても最後まで試合ができます。勝ったり、負けたりという経験を重ねて、子どもも指導者も変わっていきます。

ある愛知県のチームは、ずっと大量失点で負け続けたけど、最後の最後に勝った。キーパーの子は涙を流して、家に帰ったら（キーパーが使う）グローブを買って、と母親に頼んだそうです。そんなこと言うような子じゃなかったのに、大会を通じてサッカーに対する意識が変わったんですね。選手たちも練習熱心になって、地元の大会でも好成績をおさめるようになったそうです。どんなレベルで出てきても得るものがあるのかなと思います。

――審判は地元の高校生、記録員は中学生が務めます。

清水では小学生のころ草サッカーの試合に出て、中学生になると記録員、高校生では審判に、大人になったら指導者に、という流れが定着しています。こうしたものが文化のようになっていましたが、コロナの影響でいったん止まってしまった。いろいろなことがゼロから始まるような感覚です。

どんな水準でも 得るものある

――地域でつくっている大会なんですね。

地元の少年団やクラブチームに関わる大人たちに各地のグラウンドの運営に携わってもらっています。この規模の大会を実現できるのは、地域の方々の支えがあるからです。

全国の子どもたちに静岡・清水に来てもらい、地元の子どもたちと交流しながら切磋琢磨してもらいたい。チームの合宿での共同生活を体験し、学校では得られない多くのことを学んでほしいですね。

（聞き手・黒田壮吉）

にしむら・つとむ　小学6年からサッカーを始め、ポジションはキーパー。清水第一中、清水東高、順天堂大でサッカー部。保健体育の教諭として静岡に戻り、中学生を指導。2008年から全国少年少女草サッカー大会実行委員長。清水サッカー協会理事長も務める。

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。